



自己有用感の育成に繋げる大人の眼差し

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」という山本五十六氏の有名な言葉があります。これは、本校教育の基盤となる「なすことによって学ぶ」という特別活動の教育理念とも合致します。しかし、この「ほめる」という言葉には、捉え方にやや注意が必要なのです。

「ほめる」という行為は、ほめる（自分）側に基準があり、自分の基準以上だとほめ、自分の基準以下だと叱責に繋がります。

一方で、「認める」という行為は、認められる（相手）側に基準があるのです。「当番活動を率先して頑張ってくれたね。」「雑巾をそっと掛けてくれたね。」「お風呂掃除してくれて助かったよ。」などと相手の具体的な姿を認めることができるからです。

国立教育政策研究所の生徒指導リーフによると、「日本では『自己有用感』の育成を目指す方が適当と言える」と明記されています。自己有用感とは、「誰かの役に立った、誰かに喜んでもらえたなど、相手の存在なしには生まれてこない感情だからです。

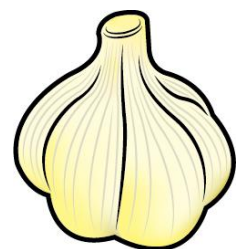
昨年度から、本校では、道徳科と特別活動を中心とした道徳教育に取り組み、自己有用感の育成を目指してきました。子供たちの心や行動の変容を認めるために、帯西レンジャーや「心のパズル」を使って道徳の内容項目をわかり易く示し、共通の評価ツールとしてきました。その結果、子供たちの自己有用感が伸び、教師の自信にも繋がりました。

前述した、山本五十六氏の言葉には続きがあります。「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず」これは、まさしく本校の特別活動を通した自己有用感の育成を目指す姿そのものです。自己有用感とは、人が生きていく上で、決して揺らぐことのない基盤となるものです。子供を見つめる教師のそして我々大人の眼差しが問われてくるのです。



コロナ禍でヒットした食べ物

それは、ずばり「ニンニク」です。ニンニク健康効果への期待の高まりや、マスクによって食後のにおいに関心をもちなくなったことが背景にあるそうです。調査会社のデータによると、おろしニンニクや、粉・スライスのニンニクといった関連の香辛料や調味料の売れ行きは、新型コロナの流行以降に急拡大したそうです。2022年の販売金額は約87億円で、コロナ流行前の1.3倍になったそうです。確かに、ニンニクは疲労回復や抗がん剤作用があり、健康によいとされてきました。



私もコロナ禍でもへこたれない、ニンニクの力にあやかりたいと思いました。